つて場内の成行を報告しつゝさかんに煽動をつゞける肥大漢の鈴木文治氏の俤もなつかしく思ひ出される。黎明會の創立記事にみえる福田德三博士、中央公論の主筆だつた瀧田樗蔭氏、今井嘉幸博士、横濱の富豪の左右田博士、大庭柯公氏、早稻田大學教授の木村文學士、これらの人々はみな當時の重要人物だつた。無政府主義の論文をかいて牢獄に投ぜられた法科大學助教授森戸辰男氏も當年の花形思想家であつた。

この書物の中に福田博士たちが天ぷらを會食する席上で堺利彥先生が福田君たちも實踐運動をやらねばだめだと皮肉まじりに話す光景があるが、明治三十年代から苦勞しぬいた日本社會主義の父堺先生の面影がなつかしく思出される。

新人會の段になつて、麻生君が岡上君の紹介で私を仲間に引入れる描寫がある。當時私も岡上君と同じ滿鐵東亞經濟調査局にゐた。大正八年二月頃の新人會の演說會には早稻田から大山郁夫氏も來られた。宮崎龍介君もこの書中で活躍する。私が月島で一緒に住んだ坑夫高嶋君はいまはどうしていることやら。

宮崎龍介君が支那の革命家黃興氏が目白にたてた豪壯な邸宅を監理してゐたが、同君の好意によつてそれが新人會に提供され多くの若い人達が集つた。麻生君と私がそこでリーダー格のやうになつて住んだ。そこに出てくる人物には平貞藏君や波多野鼎君や新明正道君などがゐる。龜戸のセルロイド工場の職工として出立し、後に異常な組織的能力を發揮した渡邊政之輔君も出てくる。目白の家をたづねてき

て麻生君と革命について議論をして、自分は神を信ずると悲壯な告白をする賀川豐彥君は、革命には反對であつたが目白の家に心を引かれるところがあつたとみえて度々訪問して來た。

麻生君のよいところは決して人を憎まぬことである。この書物でも毒々しい惡意で人を傷つけるやうなところは一ケ所もない。誰に對しても溫い氣持でその人の長所をよく描いてゐる。これはわざとするのでなく同君の性格から自然さうなるのである。

この書物の中にはマルクスやレーニンの肖像畫のことがよく出てくる。麻生君は鉛筆畫でそれをかくのが好きで且つ上手であつた。いつぞや私がマルクスの顏を描いてもらつたことがあるが出來があまりよくなかつた。麻生君の奧さんが、「佐野さんから賴まれたといふので一所懸命描いたのですが少し固くなつて出來がまづいのださうですよ」といつたことを覺えてゐる。

最後に言つておきたいが麻生君は日本を熱愛してゐた。古くさい國家主義からでなく純潔な感情で日本民族を愛しそのよい傳統に憧憬をもつてゐた。甘たるいインターナショナリストやエゴイスチックなニヒリストは嫌ひであつた。そのやうなところはこの書物にも出てゐる。

要するにこの「黎明」は大正七・八年の時代的空氣と社會運動のあけぼのの時代の好記錄である。この書物に描かれてゐる人達は既にたくさん故人となつたり、個人個人では考へが色々かはつてそれぞれの道を歩いてゐる。しかし今日の時代は大正七・八年の黎明時代と深いつながりがある。敗戰國日本のいたましい現實の中にあつて民族の基盤に立ちつつ勤勞者中心の社會主義日本を建設せんとする人々は

この書物から多くの感動をうけるにちがひない。

昭和二十二年七月

佐野學

7708

昭和二十二年九月二十五日印刷
昭和二十二年九月三十日發行

定價五十圓

著者　麻生久
東京都中央區木挽町五ノ二綠ビル

發行者　海口守三
東京都板橋區志村町五番地

印刷者　楠末治
東京都板橋區志村町五番地

印刷所　凸版印刷株式會社

發行所　海口書店
東京都中央區木挽町五ノ二綠ビル
會員番號A二二一〇一一號
電話銀座(57)一四五一番

288
081.6
A93

23 年 7 月 9 日 1947

終

凸版印刷株式會社印刷